



気になるあいつ
わかぎゑふ

双葉社

着物の魅力

ラックシステムという劇団をやっている。大阪弁の人情劇が中心で明治、大正、昭和と時代の流れを書くことが多い。そのためか年に何回か着物を着ている期間がある。稽古中からきるものだから自然と動きも着物に合わせてしまうことになる。

洋服を着てるのについ袖があるつもりで手繰っていたり、ジーンズをはいているのに裾が気になったりする。「癖って怖いな」と思いつつその期間を過ごす。

私は比較的小子供のころから着物が傍にあった。母が日本舞踊をやって

いたし、いつも着物を着ていたからだ。おまけに着物をきるだけではなく、かなり着豪奢でなにかイベントがあるたびに買っていたからだ。母は私にも着物のよさみたいなのを教え込んだ。

「この着物見てみ、これは絹物やで。触ったらしつとりと手に馴染むやろう。これが上等の証拠や」

などと子供の私に言い、実際に触らせて感触を覚えさせた。勉強なんか一回も教えてくれたことがなかったが、着物関係のことだけはやたらとうるさかった。

「変な親やなあ。着物のことなんか教えてくれんでええのに」
なんて思っていたが、芝居をやるようになったらその時の知識がものすごく役に立ち始め、今では母に感謝している。

どの時代にどんな柄が流行っていたか、どんな時にどんな着物を着るべきか、帯との関係や小物の使い方に至るまで資料を見なくても頭に入っているのはありがたい。同じ40代の女優がそのことで苦労して映画か

ら情報を得ようとしたり、昔の雑誌をむさぼり読んでいるのを見たら「ああ、お母ちゃんに感謝やわ」と思う。

今回の写真は、大正時代に流行った羽織である。東京で芝居中なのだが、劇場の近くの古着屋で売っている。袖が少し長めで、柄が洋服っぽい一枚だ。今、呉服屋さんで買おうと思っても絶対はない。

見つけたときに、

「いや、これはええわ。保存状態もええし、こんな柄もうないで」

などとオバハン臭いことを言いつつ値段を見た。他にも羽織はあるのだが、それが一番高く四万三千円だった。「やっぱりな」と唸った。

…買うべきか、買わざるべきか…探そうと思ってももうないあの一枚
……。

あの値段じゃ簡単に売れないだろうと思いつつ、店の前を通りながら思案中だ。大阪に帰るまでに結論を出さなくてはならない…うーん…気になる。あの羽織が気になってしょうがない。次の芝居は昭和初期の話だ…

年代もぴったり合うし、役も決まっている。自分が着れると思うとなおさら迷う。頭の中では買おうと思っっているのだが…。

そんな久しぶりに女っぽい迷いを抱えながら過ごしている。ちよつと楽しい。

【著者略歴】

わかぎさるふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっこのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
